

# 『和泉式部日記』の物語的虚構化の方法

高 木 和 子

## はじめに

『和泉式部日記』は『和泉式部物語』と題される写本があることから知られるように、単に日記という枠組みの中でのみ理解できるものではない。和泉式部自作説、他作説の論争は、今日おおむね自作説が安定的評価を得ているものの、仮に自作であるにせよ、和泉式部の経験を写實的に叙述した類のもでないことは、誰しもに了解されるであらう。他作説の根拠とされた、和泉式部を「女」と呼称する歌物語風の語り口や、女が知るはずのない帥宮の日常の状況を叙述した所謂第三者的視点の導入などは、この日記の抱える物語的要素としてしばしば指摘されてきたものであり、歌にまつわる小話を集成しているという意味では、歌物語に近似した性格を具備している。その一方、この作品があくまで時系列的に進行し、かつ、帥宮と和泉式部との和歌のやり取りに終始している点からすれば、『伊勢物語』や『大和物語』などにくらべて、はるかに統一性が高いこともまた、自明である。

仮にあくまで『和泉式部日記』を「日記」として解するとしても、『土佐日記』がその船旅の行程を描き出す際に、写実性に徹するよりは、屏風歌的な発想を媒介に人工的な風景を切り出したこと、あるいはまた、『蜻蛉日記』

上巻が私家集のたとされ、女の内面を和歌と散文によって吐露するという文芸史上の新しい試みが、既存の文芸の様式に寄り添いながらもそこから離脱することで果たされたことなどをも考え合わせるならば、〈日記〉であることと、その虚構性、物語性とは矛盾せず同居し得るものだといえよう。裏返せば、日記とは、既存の文芸の様式を基盤にしながら、それを時系列的な統一という名目のもとに再構築しているために、既存の文芸の様式を超えやすい形式であるとも言い得ようか。

『和泉式部日記』の場合、帥宮と和泉式部の交渉が、一貫して「宮」と「女」とのやりとりとして語られるところには、「男」「女」の呼称によって語られる歌物語の叙述形式を範型としたことが明らかである。とはいえ女を主人公とする恋の物語『竹取物語』『落窪物語』は、求婚譚や白鳥処女説話、継子譚などの型によるものであり、『和泉式部日記』がそのような既存の長編物語の型におさまるものではないという意味では、これは、〈物語〉というよりはやはり〈日記〉なのだろう。しかしその一方で、個々のプロットに目を向けるならば、それぞれは必ずしも独自のではない類型的な物語の場面の集積であり、いわば、物語の素材集、とも言い得る性格を具備している。『伊勢物語』を業平という男に仮託して恋のさまざまな形を披露する小話の累積と捉えるならば、『和泉式部日記』を、女の恋のあれこれの小話の収集、と解することはできないか。とりわけ、ここでは宮と女との和歌の応酬の形がそれぞれに多様であり、恋の場面としてどれ一つとして同じ形を繰り返さず多様な姿を見せること、その個々の応酬の妙味にこそ、この作品の虚構性の本質があるのではないかと考えられるのである。

このように『和泉式部日記』の抱える贈答歌を核とした小話の質を明らかにしつつ、この作品の方法意識に迫りたいと考える。

## 一 長編物語的虚構の方法

『和泉式部日記』が、その叙述の随所において、月日によって語り出されるところには、日記としての性格が確認できる。まずは冒頭の一節、「夢よりもはかなき世の中を、嘆きわびつつ明かし暮らすほどに、四月十余日にもなりぬれば」(小学館新編日本古典文学全集、一七頁)に始まり、「晦日の日」(二四頁)、「二日三日ありて」(二四頁)、「またの日」(二五頁)、「三日ばかりありて」(二六頁)といった具合である。以下列挙するならば、「五月五日になりぬ」(二九頁)、「二三日ばかりありて」(三四頁)、「またの夜」(三五頁)、「かくいふほどに、七月になりぬ。七日、」(四一頁)、「晦日がたに」(四一頁)、「かくて二日ばかりありて」(四二頁)、「かかるほどに八月にもなりぬれば」(四三頁)、「晦日がたに」(四六頁)、「九月二十日あまりばかりの有明の月に」(四七頁)、「かくて、晦日がたにぞ」(五二頁)、「かくいふほどに十月にもなりぬ。十月十日のほどにおはしたり」(五三頁)、「かくて、二三日おともせさせたまはず」(六一頁)、「二日ばかりありて」(六二頁)、「またの日」(六三頁)、「またの日のまだつとめて」(七四頁)、「十一月朔日ごろ」(七五頁)、「またの日、つとめて」(八〇頁)、「十二月十八日、月いとよきほどなるに」(八二頁)、「年かへりて正月一日」(八五頁)等が挙げられる。

これらの日時 of 明記は、『土佐日記』における日時の叙述とは明らかに異なっている。『土佐日記』の日は具注暦を型とする日次の形式であるが、『和泉式部日記』の場合は、それ自体がすでに選り取られた日時だと考えられるからである。というのは、ある出来事から起算された「またの日」「二日三日」といった相対的な時間の経過の叙述を除くと、随所に見られる「晦日の日」への注目と、「五月五日」「七月……七日」「正月一日」といった節日が刻まれており、「九月二十日あまりばかりの有明の月」が物語における男女の交渉の設定として最も典型的な日時であるこ

とを考えれば、前述の日時の中で、二人の固有の経験に由来する日時は、宮との出会いの折である「四月十余日」と、宮の邸に引き取られた折である「十二月十八日」のみであるといえるのではなからうか。このことは、一つには、実態としての「宮」と「女」の交渉がこうしたへ折への意識に呪縛されていたからだ、と理解ができるが、先行研究においては日時設定の矛盾が指摘されていること――すなわち、たとえば『和泉式部日記』中に五月五日のこととして載る京洛洪水は、『本朝世紀』『日本紀略』には長保五年五月十九日、二十日両日のこととされる、といったこと――を勘案すれば、この作品がへ折へを意識しつつ出来事を切り取り、一つの作品として構築したからだ、と考える方が妥当であろう。いずれにせよ、この作品に平安朝の歳時意識、ないしは物語的へ折への意識による呪縛が透けて見え、よりうがった見方をするならば、四月から翌年の正月という期間を切り出して一つの作品に仕立て上げていること自体、同じ趣向を二度は繰り返さず、可能な限り趣向を多様に披露しようとする、企まれた設定と解することもできるのである。

このように、日記の軸となるはずの日時設定自体に虚構性を見出しうるとすれば、そのほかの部分にも物語的場面設定の類型を見出すことはたやすい。たとえば、日記冒頭、花の枝を贈るところから始まる男女の関係、という点に注目すれば、男女の馴れ初めではないが『源氏物語』賢木巻において野宮を訪問した光源氏が六条御息所に賢木の枝を差し出す場面(②八七頁)が類例として思い出される。夕顔巻において光源氏の所望に応じて邸の女が花と和歌を捧げるところから拓かれる物語展開(①一三七頁)も、類例といえるかもしれない。また、宮が訪問するものの女が応じない場面、女の浮気な噂によって宮の外出がとどめられる場面は、終始繰り返されるもので、そのほか、女が宮の邸や方違への先に外出しての逢瀬も目立って印象的な場面である。これらも、事実に基づくとも考え得るが、たとえば、女の外出による逢瀬が、夕顔巻における光源氏と夕顔(①一五九頁)や、浮舟巻における匂宮と浮舟(⑥一五〇

頁）等に見出せることを考えるならば、これも物語の類型的場面設定とも言い得るだろう。

なかでも乳母による外出の諫め（三〇―三二頁）などは、『源氏物語』宇治十帖で、乳母ならぬ実母明石の中宮が、匂宮の外出を引き止める様を思わせる（総角⑤二七六、三〇一頁など）。また、しばしば帥宮の側近として登場する「右近の尉なる人」（二〇頁）とは、惟光が光源氏のお忍びの恋を手配する役割を果たすのに匹敵することから類推するに、惟光と同様、帥宮の乳母子である可能性が高い。とするならば、乳母が帥宮の忍び歩きを右近の尉の責任として語る、「すべてよくもあらぬことは、右近の尉なにがしがし始むることなり」（三〇頁）とあるところには、乳母と「右近の尉なにがし」との親子関係を読むのがよいと思われる。仮に乳母と右近の尉とが親子関係でなかったとしても、知らない人物であることはあり得ないのだから、いずれにしても「なにがし」とは、本当はよく知っている人物について、わざと婉曲な言い方をしたものである。さらには、小舎人童と樋洗童の恋（三九頁）、といった主君の恋と同時並行的な従者同士の恋は、『落窪物語』における帯刀と阿漕の關係が少将と落窪の君の關係を取り持つ例や、『源氏物語』夕顔巻で光源氏を夕顔に手引きするに当たって惟光がまず夕顔の女房と懇ろになる展開（夕顔①一五一頁）、宇治十帖に見られる、匂宮の従者時方が浮舟の女房侍従と懇意になる展開（浮舟⑥一五三頁）などを思わせる。さらに、薫や匂宮の従者たちと宇治の邸の女房との懇意な關係が、薫や匂宮に女君周辺の情報を提供する、といった展開は、小舎人童と樋洗童の間で、帥宮が先夜訪れた折に女の家の前に車があったため引き返した、などという情報が交わされる（三九頁）のと類似する。

このように見てみるならば、『和泉式部日記』における叙述は、物語的視点によって切り取られた出来事である、と言い得よう。その場合の物語とは、平安朝物語一般と考えても差し支えないが、成立時期との關係で即断は避けるものの、あえて憶測を述べるならば、『源氏物語』夕顔巻や宇治十帖を強く想像させる。それは、この『和泉式部日

記』が歌物語的であるといわれつつも、歌物語そのものを超えた一種の長編物語に似た統一感を持つところとも関わる問題だと考えられる。

## 二 贈答歌の掛け合いの特質

とはいえ、『和泉式部日記』の独自性がより際立つのは、その和歌の贈答の形式である。すでに、鈴木一雄氏が『全講和泉式部日記』（至文堂・一九六五年、改訂版一九八三年）において、この日記中の贈答歌のやり取りに注目しながら、個々に精緻な分析をほどこしているが、ここでは、多種多様な物語的場面の累積としてこの日記を考えるという立場から、贈答歌のあり方について再考してみたい。

この日記中の贈答の形式には、きわめて多様な形がある。贈答歌の基本形が、男女一首ずつの贈歌と答歌の一对であるとするならば、その変則的な形が多く見られるのである。石山寺に参籠中の女と都の帥宮との贈答（53～61、歌番号は『新編国歌大観』による）、手習の歌と初句揃えの返歌の贈答（64～73）、古歌そのままの借用による贈答（136・137）などは顕著な事例であろう。そこでより詳細に事態を確かめるべく、以下に贈答歌の特質別に簡略に整理する。鈴木一雄氏の前掲書にすでに、贈答歌のあり方についての簡便な一覧が示されているが、以下の分析は、贈答の連鎖の認定など若干見解を異にすることがある。

### （A）贈答が宮一首、女一首の一对の例

#### （i）宮から和歌を詠む場合

（宮／3↓女／4）（宮／5・散文↓女／6・散文）（宮／7↓女／8）（宮／散文・9↓女／10）（宮／16・

- 散文↓女／17・散文）（宮／19・散文↓女／20）（宮／21・散文↓女／22・散文）（宮／散文・29↓女／30・散文）（宮／33↓女／34・散文）（宮／散文・35↓女／36）（宮／37↓女／38）（宮／39↓女／40）（宮／散文・45↓女／46）（宮／47↓女／48）（宮／62↓女／63）（宮／80↓女／81）（宮／92↓女／93）（宮／108↓女／109）（宮／125↓女／126）（宮／136↓女／137）（宮／138↓女／139）（宮／140↓女／141）（宮／142↓女／散文・143）
- (ii) 宮から言葉・文・物・人を遣わすことから始まる場合

- （宮／枝・言葉↓女／1↓宮／2）（宮／手紙↓女／27・散文↓宮／28）（宮／言葉↓女／42↓宮／43）（宮／手紙↓女／49↓宮／散文・50）（宮／手紙↓女／78↓宮／79）（宮／手紙↓女／95・散文↓宮／96）（宮／手紙↓女／散文・123↓宮／散文・124）（宮／手紙↓女／127↓宮／128）（宮／手紙↓女／144↓宮／145）
- (iii) 女から和歌を詠む場合

- （女／14↓宮／15）（女／31・散文↓宮／32・散文）（女／41↓宮／44）（女／51・散文↓宮／散文・52）（女／97↓宮／98）（女／114↓宮／散文・115・散文）（女／116↓宮／117・散文）（女／118↓宮／119・散文）
- (iv) 女から言葉・物・人を遣わすことから始まる場合  
なし

(B) 贈答が宮と女との一対ではあるが、一首の形を具備しない、あるいは複数首の例

- (i) 宮から和歌を詠む場合

（宮／94下↓女／94上）（宮／131上↓女／131下）

- (ii) 宮から言葉・文・物・人を遣わすことから始まる場合  
なし

(iii) 女から和歌を詠む場合

(女／132・散文・133・散文↓宮／134・散文・135・散文)

(iv) 女から言葉・物・人を遣わすことから始まる場合  
なし

(C) 一首ずつの贈答が一对でなく、連続する例、もしくはより変則的な例

(i) 宮から和歌を詠む場合

(宮／散文・23↓女／24・25・散文↓宮／26・散文) (宮／53・散文↓女／54・散文・55↓宮／散文・56・散文・57・散文↓女／58・59↓宮／散文・60↓女／61) (宮／64↓女／散文・65・散文・66・散文・67・散文・68↓宮／69・70・71・72・73・散文) (宮／77) (宮／散文・84↓女／85・86・散文↓宮／散文・87↓女／散文・88↓宮／89・散文↓女／90↓宮／91) (宮／99・散文↓女／100・散文・101↓宮／102・103↓女／104・散文・105↓宮／106↓女／107)

(ii) 宮から言葉・文・物・人を遣わすことから始まる場合

(宮／小舎人童↓女／11↓宮／12・散文↓女／散文・13・散文) (宮／手紙↓女／18・散文) (宮／手紙↓女／散文・74・散文・75↓宮／散文・76) (宮／手紙↓女／散文・110↓宮／111・散文↓女／手紙↓宮／112↓女／113) (宮／手紙↓女／120↓宮／121↓女／122) (宮／手紙↓女／129・130)

(iii) 女から和歌を詠む場合

(女／82↓宮／83)

(iv) 女から言葉・物・人を遣わすことから始まる場合



なし

この整理を一覧して特徴を数えるならば、まず、①宮からの働きかけによって始まる贈答歌が圧倒的に多く（A i、B i、C i）、②宮からの贈歌と女からの答歌という典型的な一対をなす事例が実に多い（A i）。また、③一見、女から宮への贈歌に見える場合でも、その前に宮から物が遣わされるなどの働きかけから始まっている事例が多く（A ii、C ii）、実質的には宮の動きに対して女が受身に反応する形となっている。その結果、④女からの働きかけによる贈答歌は限られており（A iii、B iii、C iii）、⑤女から、和歌を伴わない言葉のみの手紙や物だけが贈られて始まる事例はない（A iv、B iv、C iv）。また、⑥和歌に添えられる散文の詞に関しては、どちらかと言えば宮の方が饒舌な印象を受ける。

なお、和歌を伴わない散文のみの手紙が示される場合、実際には和歌が詠まれていたのだけれども、作中には描写されなかった可能性も、一応想定してみる必要があるだろう。なぜなら、散文の言葉が面々と連ねられる手紙の場合でも、5番歌などは、

また、御文あり。ことばなどすこしこまやかにて、

「語らははなぐさむこともありやせむ言ふかひなくは思はざらなむ

あはれなる御物語聞こえさせに、暮にはいかが」

（二一〇頁）

とあって、叙述されている文面が実際にあった文面的一部分に過ぎないと考えてよい例といえるからである。それならば、宮からの贈歌が実際にはあったのだとしても、叙述の上では省略されている、という場合もあるかもしれない。

しかし、その一方、⑤の特徴にあるように、女から和歌を欠いて、物もしくは散文の手紙を贈ることから、両者の交渉が始まる事例はない。この作中では、宮から和歌・手紙・伝言などといった働きかけがあれば、女は返歌するのが原則であり、女側が和歌でない散文の手紙や物のみで返すというのは、まずあり得ないのである。あえていえば110～113番歌への連鎖、宮の手紙↓女の和歌(110)↓宮の和歌(111)↓女の散文↓宮の和歌(112)↓女の和歌(113)の中で、宮の111番歌と、宮の112番歌の間に、女の散文による手紙が差し挟まれるのが例外的な事例である。ただし、ここでは、女の宮邸入りの決意ののちに、宮から女の男性関係の噂についての詰問の手紙を受けて女は返事も書けず、再度の宮の手紙にかりうじて女が和歌を詠み、贈答が成立したのちに、女が宮の不信感への憤りを込めて贈ったのであったから、一種の特殊な状況を物語っているものであり、異例な型を一つ示しているのだといえるだろう。

このように見る限りでは、宮からの散文のみの手紙は、本来和歌があつたけれども和歌を描かなかつた、という手合いのものではない、と、一応は理解できるように思われる。

また、③の、一見、女からの贈歌ともよべるようなやりとりであっても、必ずしもそのように判断できない事例として、たとえば、両者が関係を持った翌日のやりとり、11・12・13番歌を見てみよう。

思ひ乱るるほどに、例の童来たり。御文やあらむと思ふほどに、さもあらぬを心憂しと思ふほども、すぎずきしや。帰り参るに聞こゆ。

待たましもかばかりこそはあらましか思ひもかけぬ今日の夕暮

御覧じて、げにいとほしうもおぼせど、かかる御歩きさらにせさせたまはず。……(中略)……暗きほどにぞ御返りある。

「ひたぶるに待つとも言はばやすらはで行くべきものを君が家路におろかにやと思ふこそ苦しけれ」とあるを「なにか。ここには、

かかれどもおぼつかなくも思はえずこれも昔の縁にこそあるらめ

と思ひたまふれど、なぐさめずはつゆ」と聞こえたり。……

(三三四頁)

逢瀬ののち二日目の両者の関係が描かれている。「さもあらぬを心憂しと思ふほども、すぎずきしや」と、帥宮からの文がないことに落胆する女は、内心は宮の二日目の夜の訪問を期待していたのであろう。その女に、仮にも童が使者として遣わされてきた場合、童に手ぶらで宮のところに帰らせる、ということが女に可能であったかどうか。女との身分差からしても、昨夜逢瀬の時を持った女の心情からしても、返歌せざるを得ないものではなかったか。女にできたのは、「待たましもかばかりこそはあらましか……」と、男の訪問などそもそもあてにはしていない、という姿勢を見せながら、「思ひもかけぬ今日の夕暮」と、心外な、という思いを歌に託して矜持を見せる程度のことではない。一方、「暗きほどにぞ御返りある」とされる宮の歌には「ひたぶるに待つとも言はば……」とあって、強気を装った女の歌の言葉尻を捉えるように、今夜訪問しないことを自己弁護するものとなっている。この場合、形の上では、女↓宮の贈答となっているが、宮の和歌がおそらくは小舎人童の手によって伝えられた以上、女には再度返歌をしないわけにはいかなかった、ということであろうか。それから翻ってみれば、冒頭の場面で、宮から、「おなじ枝に」の歌を贈られながら、「をかしと見れど、つねはとて御返りも聞こえさせず」（一九頁）とあるのは、女の毅然とした有様を示した一節といえるだろう。

このように見てみると、④にあるように、女からの働きかけによって両者の交渉が始まるやりとりは、決して多くなく、やや特殊な事例といえる。従って、女からの贈歌に始まる贈答歌をいかなるものとして理解するかが、この日記の理解に大きく関わる問題であると思われる。この問題については、つとに鈴木一雄氏が、贈答歌は男から女へと贈られるのが基本であり、女からの贈歌は女の心理的緊張による切迫した事態の現れと捉えた説が名高い（前掲書）。この氏の理解は、時には、『和泉式部日記』、という単独の作品の理解を超えて、平安朝の和文における贈答歌の方法

の理解に敷衍されがちでさえもあるのだが（鈴木一雄「源氏物語の和歌」『国文学』一九六八年五月）、しかし、実は、その判断はいささか早計ではないかと思われるところがある。

たとえば、14・15番歌を見てみたい。

晦日の日、女、

ほととぎす世にかくれたる忍び音をいつかは聞かむ今日もすぎなば

と聞こえさせたれど、人々あまたさぶらひけるほどにて、え御覽ぜさせず。つとめて、もて参りたれば見たまひて、

忍び音は苦しきものをほととぎす木高き声を今日よりは聞け

（二四頁）

初めての逢瀬以来進展のなかった両者は、この、女からの贈歌によつて再び宮が訪問することになるのだから、これは両者の関係の危機を救うきつかけになった和歌である。しかし、問題はこれが「晦日の日」の贈歌である点にある。女からの和歌はすぐには宮の目に入らなかったために、宮の返歌は翌日、すなわち、翌月のものとなっている。一対の贈答歌が二ヶ月にわたっている、という趣向自体に妙味があるやりとりであることは、「いつかは聞かむ今日もすぎなば」「木高き声を今日よりは聞け」とある、両者の和歌の下の句の対応関係からも顕著であろう。両者の和歌は、「ほととぎす」「忍び音」「聞く」「今日」といった共通の語彙を語順を換えて詠み込んだもので、典型的に呼吸のあった一対をなしている。女からの贈歌は、「女の、恋に對するある種のあせりや不安」（鈴木一雄、前掲書一〇六頁）の現れであるよりは、むしろ、この折を見過ごさない女のあり方を象徴するものとしてここに位置付けられているのではなからうか。後続の展開の中で、折の意識を大切にする両者の意識が「かかる折に、宮の過ごさずのたまはせしものを」（四一頁）、「例の折知り顔に」（四六頁）、「なほ折ふしは過ぐしたまはずかし」（四八頁）などと強調されるからである。さらにうがった見方をすれば、宮の返歌が翌日になったのは、宮が当日、女の和歌を見ることができな

かったためではなく、四月と五月の二ヶ月をわたる形の贈答歌に仕立てるための企まれた趣向といえなくもない。

同様に、宮に邸まで車で連れてゆかれた女が、人目を忍んだ逢瀬のひと時を持ち、翌朝、女一人が車に乗せられて自邸に戻る場面、31・32番歌を見てみよう。

女、道すがら、「あやしの歩きや。人いかに思はむ」と思ふ。あけぼのの御姿の、なべてならず見えつるも、思ひ出られて、

「宵ごとくに帰しはすともいかでなほあつき起きを君にせさせし

苦しかりけり」とあれば、

「朝露のおくる思ひにくらぶればただに帰らむ宵はまされり

さらにかかることは聞かじ。夜ざりは方ふたがりたり。御迎へに参らむ」とあり。

(三二—三三頁)

宮と女との感情は、女の宮の邸訪問という特殊な状況によつて、高揚しきつてゐる。したがつて、なぜ女からの贈歌かといえは、女が男の邸を訪れる屈辱を二度と味わいたくないというだけでは充分な理解とはいえない。すなわち、通常の逢瀬は、男が女の家に通い、男が帰宅の途上で女に後朝の歌を贈るものであるから、ここでは、女の方が移動して女から後朝の歌を詠みかける、という具合に、逢瀬における性の役割が通常と反転しているのであつて、それ自体が、男女の逢瀬の形の一つの新しい型を見せるものとなつてゐるのである。

さらに、41・42・43・44番歌に目を移そう。ここでは、宮の訪れを間遠に感じた女が、月の明るい夜に思わず和歌を詠みかけた、という趣向である。

かくて、のちもなほ間遠なり。月の明き夜、うち臥して、「うらやましくも」などがめらるれば、宮に聞こゆ。

月を見て荒れたる宿にながむとは見に來ぬまでもたれに告げよと

樋洗童して、「右近の尉にさし取らせて來」とてやる。

(三七頁)

この叙述の限り、女は、宮の訪れの間遠さに心細さをおぼえ、月に感じて歌を詠んだ、と解釈できる。しばしば文使

いとして活躍する宮側の小舎人童ではなく、女側の樋洗童が使いに走るところもこの場面の特徴といえるが、より特筆すべきは、宮の返歌が、すぐさま訪問を決意した宮自身によって、まだ月を眺めていた女に届けられる点にある。

もののたまはで、ただ御扇に文を置きて、「御使の取らで参りにければ」とて、さし出でさせたまへり。女、もの聞こえむにもほど遠くて便なれば、扇をさし出でて取りつ。  
(三七頁)

宮は女の部屋に上がろうか否かを逡巡して庭を歩くのだった。

近う寄せたまひて、「今宵はまかりなむよ。たれに忍びつるぞと、見あらはさむとてなむ。明日は物忌と言ひつれば、なからむもあやしと思ひてなむ」とて帰らせたまへば、

こころみに雨も降らなむ宿すぎて空行く月の影やとまると

人の言ふほどよりもこめきて、あはれにおぼさる。「あが君や」とて、しばし上らせたまひて、出でさせたまふとて、

あぢきなく雲居の月にさそはれて影こそ出づれ心やは行く

とて、帰らせたまひぬるのち、ありつる御文見れば、

われゆゑに月をながむと告げつればまことかと見に出でて来にけり

とぞある。……

(三八—三九頁)

今夜はこのまま帰る、という宮に対して、女は歌を詠みかけ引き留める。「こころみに」と「あぢきなく」の贈答歌である。こうした詠歌は女からの贈歌とも捉え得るところであるが、少なくとも叙述の形を見る限り、宮からの発話があつてこそその詠歌だという趣を取っている。そして、宮が訪問時に持参した、そもその女の贈歌への返歌は、宮が帰ったのちに女が見た、という形になっており、ここでは、二組の贈答歌がA↓B↓B↓Aの形の入れ子構造になっている。このように、女の贈歌に対して宮がその返歌を持参し、かつ、その返歌が両者の逢瀬のちに女の目に触れるという形は、その文が真に逢瀬ののちに開かれたとは限らず、そのような趣向に仕立てた物語的操作であると

考えることもできるだろう。この場面における女からの贈歌は、一見、男の訪れを待つ女のやむにやまれぬ心情から出たかのように読めるのだが、実は、また一つ別の新しい贈答歌のやりとりの形式を、披露する類のものになっているのである。

このように見ていくと、女から宮に和歌を詠みかけるのは、両者の関係に対する女の不安などといった心理的動機によるものではなく、むしろ、男女の関わり方としての新しい趣向を提示するかの趣である、といえるだろう。同様のことは、82番歌の場合にも言える。宮が歌を贈ろうする矢先に、それに先んじて届けられた和歌である。

その夜の月のいみじう明くすみて、ここにもかしこにもながめ明して、つとめて、例の御文つかはさむとて、「童参りたりや」と問はせたまふほどに、女も霜のいと白きにおどろかされてや、

手枕の袖にも霜はおきてけり今朝うち見れば白妙にして

と聞こえたり。ねたう先ぜられぬとおぼして、

つま恋ふとおき明かしつる霜なれば

と、のたまはせたる、今ぞ人参りたれば、御気色あしうて問はせたれば、「とく参らで、いみじうさいなむめり」とて、取らせたればもて行きて、「まだこれより聞こえさせたまはざりけるさきに召しけるを、今まで参らずとてさいなむ」とて、御文取り出でたり。「昨夜の月はいみじかりしものかな」とて、

寝ぬる夜の月は見ると今朝はしもおきゐて待てど問ふ人もなし

げに、かれよりまづのたまひけるなめりと見るもをかし。

(五八―五九頁)

ここでは、宮が女に歌を贈ろうとして小舎人童をさがそうとすると、それに先んじて女からの文が届く。宮の返歌と呼べるものがあるとすれば、「つま恋ふと」と宮がつぶやく上の句のみで、遅参した小舎人童によって届けられた女宛ての文には、「寝ぬる夜の」の歌のみが記されていた、という語り口になっている。それが女からの贈歌を受け取

る以前に宮が作ったものであることは、女の贈歌が「手枕の袖」「霜」といった景を詠み込むのに対し、宮の歌が「月」を詠むという表現の不一致によって女に納得される、という趣向なのである。しかし、宮のつぶやいた「つま恋ふと」の和歌も、宮の文によってもたらされない限り、女の知るところとはならないはずである。とすれば、「つま恋ふと」の歌も宮の文のうちに記されていたと考えるのが自然であり、この解釈に立てば、ここで、あたかも女の贈歌に対して、宮もまた「返歌」ではなく「贈歌」を遣わしたのだとするのは、この作品の趣向のなせるわざと理解すべきところであろう。

女からの贈歌が、女の不安や危機感に誘発されたものでないとはいえない。51番の歌は、女がまだ明るいうちに宮に顔を晒して逢瀬の時をもったそののち、宮の無沙汰を氣にかけて、女がやむなく「くれぐれと秋の日ごろにふるまに思ひ知られぬあやしかりしも」との和歌を贈ったものであり、女の両者の関係への不安の現れともいえなくもない。また、97・98番の贈答歌も、

かくてあるほどに、またよからぬ人々文おこせ、またみづからもたちさまよふにつけても、よしなきことの出で来るに、参りやしましと思へど、なほつつまじうてすがすがしうも思ひ立たず。霜いと白きつとめて  
わが上は千鳥も告げじ大鳥のはねにも霜はさやはおきける  
と聞こえさせたれば、

月も見で寝にきと言ひし人の上におきしもせじを大鳥のごと  
とのたまはせて、やがて暮におはしましたり。

(六四頁)

女と他の男との噂によって訪れが途絶えた折のものであり、二人の関係を憂慮したものともいえるであろう。しかし、それでさえここでも「つとめて」とあるように、逢瀬の翌朝でもない朝に、女から遣わされた和歌であるという設定の特殊性を見過ごすべきではない。



さらに、宮邸入りを前にした、114・115番の贈答歌「霜がれはわびしかりけり秋風の吹くには萩の音づれもしき」  
「かれはててわれよりほかに問ふ人もあらしの風をいかが聞くらむ」では、宮の訪問のない近況を憂いた女の贈歌によつて、宮の来訪を促している。これに続く116・117番の贈答歌「つれづれと今日数ふれば年月の昨日ぞものは思はざりける」「思ふことなくて過ぎにし一昨日と昨日と今日になるよしもがな」は、宮邸入りを決意しかねて逡巡する女の心の揺らぎを表しており、「今日はつねよりもなごり恋しう思ひ出でられて、わりなくおぼゆれば」と女はやむにやまれぬ思いから歌を詠みかけるのだが、宮邸に入るか否かを逡巡する女が、自分の決意を促すかどうか宮の気持ち確かめようとする趣である。続く118・119番の贈答歌もまた、女からの贈歌によるもので、「木の葉も残りなく、空も明かう晴れたるに、やうやう入りはつる日かげの心細く見ゆれば、例の聞こゆ」と「心細く」感じた女の、「なくさむる君もありとは思へどもなほ夕暮はものぞかなしき」との贈歌と、宮の「夕暮はたれもさのみぞ思ほゆるまづ言ふ君ぞ人にまされる」との返歌が叙述されている。こうした女の訴えは、「またの日のまだつとめて、霜のいと白きに、「ただ今のほどはいかが」と、宮の気遣いの手紙を誘発することになる。この、114・115番贈答歌、116・117番贈答歌、118・119番贈答歌は、女からの贈歌が三組続く、という意味で一連のものと考えられ、それが企まれたものであるか否かは別として、総体として新しい一つの型をなしているところもできよう。

さらには、132・133・134・135番歌は、「うつつにて思へば言はむ方もなし今宵のことを夢になさばや」「しかばかり契りしものをさだめなきさは世の常に思ひなせとや」と女から宮へ二首の歌が詠まれ、「うつつとも思はざらなむ寝ぬる夜の夢に見えつる憂きことぞそは」「ほど知らぬいのちばかりぞさだめなき契りてかはす住吉の松」と宮もそれに応じて二首の歌を返す、という形となっている。二人の感情の高揚もさることながら、この贈答は、二首ずつの贈答という意味で一つの新たな型を示している。この後続には、宮、女それぞれが、古歌をそのままに引用した贈答、

「あな恋し今も見てしが山がつの垣ほに咲けるやまとなでしこ」「恋しくは来ても見よかしちはやぶる神のいさむる道ならなくに」が交わされている。このように見るならば、この作中の贈答の一つ一つは、それ自体が男女の贈答の掛け合いの多様な形を提示し、恋の贈答のさまざまな姿を可能な限り提示するものとなっているのである。

## おわりに

女からの贈歌は、確かに原則破りの異例といってもよい程度の数量ではあるが、それが必ずしもこの二人の関係の危機や女の不安感に根ざしているとは言いがたく、むしろ男女の贈答の掛け合いの様々なバリエーションを披露するために、物語的場面設定として一つ一つが新鮮な形を模索した結果であるとも考えられる。『和泉式部日記』の抱える物語的虚構性とは、単に「女」という呼称や女の知らないはずの宮周辺の動向の描写、といった次元の問題にとどまるものではない。変幻自在な贈答歌を核とした物語的場面を多種多様に累積させていくという意味で、企まれたテクストとして『和泉式部日記』を解する可能性があるのではなからうか。従来とすると、女の心情の動きに還元して説明されがちであった様々な事象について、戦略的な虚構の方法として理解することもできるのではないかと考えるのである。